

〒183-0034 東京都府中市住吉町 4-47-16

Tel/Fax 042-354-3044

E-Mail fuchu_nakagawara_church@hotmail.com

HP <https://www.fuchu-nakagawara-church.com>

牧会書簡／小会だより／

礼拝式文・説教／

聖書の学び／日々の祈り

2020年4月12日（第三報）

私たちの主、キリスト・イエスの死を記念する受難週を経て、私たちは祈りのうちに復活主日（イースター）を迎えます。教会の公的活動がお休みとなり、国からの「緊急事態宣言」が出された今、私たちは、どのようにこの命の喜びの日を覚え、お祝いすればよいのでしょうか。自粛か生活かの板挟みにある方々や、新学期を始められない子どもたち、命の危機に向き合っておられる方々に、教会はその先の命の希望を語りうるのか、が問われます。表題の諸文書第三報をお届けします。命をめぐる問いのただ中で、喜びと希望に根差した道を求めつつなしておられる、家庭礼拝や聖書の学び、祈りの手引きとしてお用いください。

目次

目次

牧会書簡（3）敬愛する皆さまへ～復活主日を迎えるにあたり.....	_____	1
小会だより（4月5日オンライン定期小会報告）	_____	3
礼拝式文＋説教「命の神への歌と祈りが私と共に」（4月12日午前10時30分）	_	5
聖書の学びについてのお知らせ	_____	14
日々の祈り「復活感謝・希望の祈り～とくに教会や地域の子供たちのため」	_____	16

牧会書簡（3）

敬愛する皆さまへ

～復活の日、「緊急事態宣言」にまさって驚くべき命の報せを喜び、今こそ感謝をもって祈るべきこと

イースターおめでとうございます！

この国における病の脅威は増し、ついに出された「緊急事態宣言」には、私たちが少なからぬ動揺を覚えています。このようなときに、しかし、**死が死で終わらない**、との驚くべき救いの告知がなされます。「**主は生きておられる**」！ それは、十字架に象徴される悲慘におののいていた魂を立ち上がらせる、天来の命の保証ともいうべき言葉です。私たちは、何よりこのみことばに応じて心高く、諸手をあげて、「**主の驚くべき御業**」を記念する時を過ごしたいと思います。

この日、主が「**命の主**」であられることを覚えて祝うのですから、感染の可能性や命の危険性を度外視して集合しましょう、とは申せません。神の愛しておられる命を大事にする、その意味では、教会からも、引き続き、「**自他の命を守るための外出自粛**」を、手洗いや消毒、あるいは「**ソーシャル・ディスタンス**」の実践（少なくとも 1.5m ほど間隔をあけて人と接すること）と共に呼びかけますし、今が**法的な例外状態**（いつもと異なる措置が必要な事態）であるの政府見解を一定程度（※）認めることには^{やは}かではないのです。（※）以下の条件付きで、の意。

- ① 非常時（例外的事態）にこそ、必要な**弱者への例外的な補償（いつもと異なる特別な補償）の充実**が、「なるべく官僚的でないやり方で迅速に」（ドイツ メルケル首相自宅隔離後最初のあいさつより）実現するよう、「命への畏敬」を現在の行動指針とする私たちは、教会としても個人としても具体的に求めていかなければなりません。
- ② また、これをきっかけに、戦時などにも適用される非常事態法や、国家主義・全体主義・秘密主義的に偏った法改正ないし制定をもたらそうという政治利用の流れには、教会として、必要な**抵抗措置**を、信仰的な告白に伴って選ぶ必要がある、その意味でわたしたちは「**告白的事態**」に直面していることも覚えておかなければなりません。

しかし、私たちにとっての「自粛」は、国に言われたから「ほしがりません」と言って鳴りを潜めた「いつか」のような、血の気の引いた不穏な生活に向かうものではありません。むしろ教会は、このような時こそ、さまざまな命の間に差別のない、明るい生き方を志向します——教会が、そして一人ひとりが主体的に、活きた生のあり方を求め、感染の恐れのない対話の方法（インタ

牧会書簡（3）

ーネットも有用です）を真剣に模索して、かえって豊かに言葉を交わし、支え合い、祈りの交わりを深めていくこと。また、この度の「非常事態宣言」の結果、いっそう命の危険に晒される人がいるならその側に立って声をあげること。そうして死を凌駕する命の希望を共有し、感染の危険のないあり方で祈りの叫びをあげ、喜びと感謝の歌を歌うこと。そのようにして、魂の深みから喜び溢れる闊達な生を、私たちは、それぞれ置かれた場所で体現したいのです——。そのとき、私たちにとって、「**命の畏敬**」の基礎にあるのは、**教会の復活信仰**です。私たちは、今回の礼拝休止措置にせよ、あるいは日々の生き方にせよ、命に関わるあらゆる日々の決断や行動に、初めから終わりまで復活信仰という通奏低音が鳴り響くような歩みを重ねたいと思います。

私事で恐縮ですが、この事態にあって、かつて大学生時代に神学校入学を決めるきっかけとなった聖書の句を突然思い出しました——あれから20年×365日も昼夜を重ねたのかと思うのですが、自覚としては「あっ」という間です——。それは詩編90編の、「**主よ……生涯の日を正しく数えるように教えてください**」という祈りの句でした。祈りの根底には、神の御前における命の塵のような儚さの自覚があります。しかし、その命を永遠者が顧み、霊の息吹をもって臨み、御手をもって捉えてくださるとき、短い生涯の儚いひと日が、千年のような一日になり、永遠に触れたとでも表現したくなるような、重みある意味深い時として用いられる、という信仰に私は打たれたのです。将来について悩んでいた若い日にこの言葉に触れ、そんな一日を重ねさせていただきと願い、私は牧師としての道に導かれたのでした。

今、明日の不安にある人たちが、与えられた時間を、命の主が共にいます喜びと恵みの日として「**正しく数える**」ことができますようにと祈ります。もうひとつ私事です、次女の幼稚園は一切お休みとなり、長女の中学校入学式は取りやめになりました。近現代史を省み、日本以外のアジア諸国出身の方々もおられる所で国家は歌わないという決断ゆえの緊張も取り去られ、一息つく面もありますが、何より子どもたちにとり、小学校最後の日々と中学校最初の日々が奪われた悪影響を思います。新しい日々に明るく踏み出そうとしていた皆さんに、主の顧みにより、豊かな祝福がありますように。またお会いする日まで、永遠の喜びを重ねて参りましょう。

2020年4月9日 府中中河原教会 牧師 大石周平

小会だより ～4月5日オンライン定期小会報告

—4月5日（日）、当教会としては初の試みとなる、スカイプを利用したオンライン会議として、**2020年度第4回定期小会**が、牧師・長老全員出席のうえ行われました。以下、当小会の決議・協議事項について、一部を箇条書きでお知らせいたします。

決議事項

- 第2回臨時小会の件

5月の主日礼拝等について協議するため、4月19日（日）午前11時半から、2020年度第2回臨時小会をオンラインで開催する。

- 4、5月号月報の件

4月中は、礼拝等休止の第1回臨時小会決議に伴い、結果として臨時休刊とせざるをえず、牧会書簡・礼拝式文・小会だより・日々の祈りの手引き等の諸文書（毎週発行）をもってこれに代えることとした。5月号については、判断を保留し、4月19日（日）の第2回臨時小会において対応を決議することとする。

- 礼拝休止期間中の礼拝動画配信の件

第1回臨時小会の決議を受けて試験的に始めている礼拝動画配信を、礼拝休止期間中、小会として正式に行うこととする。そのために讃美歌著作権を確認。

- 礼拝休止期間中の葬儀の指針の件

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、礼拝休止期間中の教会堂における葬儀等諸式は行わず、以下のふたつの場合にわけた対応を、遺族と相談しつつその都度検討し、最終的な判断は、小会として牧師に委ねる。

小会だより ～4月5日オンライン定期小会報告

(1) 新型コロナウイルス感染症による死去の場合、考えられる対応は以下のとおり：

病院等における納棺式や教会堂における前夜祈祷会および葬儀はこれを行わず、牧師が司式する火葬場の式をごく少数の遺族のみと（教会からは牧師のみで）短く執り行う。全員マスク着用、讃美歌は歌わず、前後の手洗い・消毒等を徹底する。その後、収骨等が行われる場合にも、牧師は加わらない。火葬場の式が行われる（およその）時間をあらかじめ教会員には告知し、同じ時間にそれぞれの場で祈り、故人をしのぶ時間を持つよう文書で呼びかける。

その後、遺族や教会員等の希望があれば、感染症流行がおさまったとの状況判断のもと、通常は行っていない記念会（ないし改めての開かれた告別式）を、教会その他を会場に開くことを小会で検討する。

(2) 上記以外の場合、考えられる対応は以下のとおり：

病院等における納棺式や教会堂における前夜祈祷会および葬儀はこれを行わず、牧師が司式する火葬場の式を少人数（牧師の他、教会員代表として長老1名）で短く執り行う。全員マスク着用、前後の手洗い・消毒等を徹底する。式が行われるおよその時間をあらかじめ教会員には告知し、同じ時間にそれぞれの場で祈り、故人をしのぶ時間を持つよう文書で呼びかける。その後、遺族や教会員等の希望があれば、感染症流行がおさまったとの状況判断のもと、通常は行っていない記念会ないし改めての開かれた告別式を、教会その他を会場に開くことを小会で検討する。

協議事項

- 礼拝休止期間中に配信する「日々の祈り」について以下のとおり申し合わせた。

第1報（3月27日発送）ジャン・カルヴァンの「夜、眠りに就く時の祈り」（渡辺信夫訳）

第2報（4月2日発送）「受難節の祈り、特に入院中の者や医療従事者のために」（担当：奥野）

第3報（4月9日発送）「復活感謝・希望の祈り、特に教会や地域の子供たちのために」（後藤）

第4報（4月16日発送）「朝、目覚めた時の祈り」（須藤）

第5報（4月23日発送）「食前の感謝の祈り」（玉山）

以上です。

【文責；小会議長 教師大石周平】

礼拝式文・説教「命の神への歌と祈りが私と共に」

復活主日を迎えます。4月12日（日）午前10時半から、主の十字架を仰ぎ、御名を崇めましょう。今回は、「詩編42～43」講解説教の第三回目となります（『聖書 新共同訳』（聖書協会 1987）を使用）。日本キリスト教団出版局による「説教黙想アレティア 詩編24－51編」（2019年105号）の中の、私自身の釈義と黙想が土台となった説教です。礼拝後、できるだけ早く礼拝動画の配信もいたしますので、教会ホームページ上で更新される「最新のお知らせ」をご確認ください。心を高くあげ、今ここに語りかけてくださる主のみことばに、ご一緒に耳を傾けたいと存じます。〔牧師 大石周平〕

招詞 旧約聖書詩編114編1～8節

——主の御前に心をしずめ、みことばに聞くことからこの一週をはじめましょう。

「イスラエルはエジプトを／ヤコブの家は異なる言葉の民のもとを去り／ユダは神の聖なるもの／イスラエルは神が治められるものとなった。海は見て、逃げ去った。ヨルダンの流れは退いた。山々は雄羊のように／丘は群れの羊のように踊った。どうしたのか、海よ、逃げ去るとは／ヨルダンの流れよ、退くとは／山々よ、雄羊のように／丘よ、群れの羊のように踊るとは。地よ、身もだえせよ、主なる方の御前に／ヤコブの神の御前に／岩を水のみなぎるところとし／硬い岩を水の溢れる泉とする方の御前に。」

讃詠 546

——ご一緒に、讃詠546番（『讃美歌』1954年版）を歌い、主の御名をたたえましょう。

「聖なるかな……、昔いまし今いまし、とわにいます主をたたえん。アーメン。」

祈祷 罪の告白と赦し／聖霊の照明を求める祈り

——全能の神の御前に、私たちの罪を告白し、赦しを求めて祈りましょう。

「全能の父なる神よ、十字架と復活の主の驚くべき御業を覚えるこの週のはじめに、愛する兄弟姉妹と共に、同じ時に、ひとつのみことばに聴き、祈りをささげる機会を与えてくださることを、感謝いたします。どうか、あなたが親しくこの祈りの共同体の只中にお臨みくださり、聖霊をもって一人ひとりの心を照らし、あなたの義と愛と真とによって満たしてくださいますように。」

礼拝式文・説教 「命の神への歌と祈りが私と共に」

主よ、わたしたちは、命のみことばに飢え、渇いています。今・ここに、いっそうの不安に揺れる私たちに、語りかけてください。罪のこの世にあって、また、この身にあって、わたしたちは、あなたの御心に反する方向に決定的に傾いており、あなたの命の御言葉によって新たに生きることがないならば、死の陰の谷に転がり落ちてしまうような者たちです。過ぐる一週の歩みの中で重ねてしまった罪を思っても、私たちがあなたの御前に恥じ入り、あなたの一方的な恵みにすがって、赦しを祈り求めるほかありません。私たちは、あなたの招きにもかかわらず、あなた以外の諸力に従い、襲い来る見えない不安に支配されて生きていました。みことばに聴かず、祈ること少なく、ただ自分の思いによって歩み、主なるあなたと隣人へのひたむきな愛に生きることをしなかったのです。

主よ、私たちは今こそ、ここに、十字架の主をあおぎ、悔いし砕けし心をもって、御前に罪を告白します。どうか私たちを憐れみ、赦し、癒してください。まことにあなたは、罪びとを招き、失われた者を探し求めて、ついには見出してくださるお方です。御子イエス・キリストをお遣わしになるほどに、世を愛してくださったお方です。どうか今、御子の十字架の血によって私たちの罪を拭い去り、汚れを洗い清めてください。主に結ばれて新しい命に生きる、復活の希望をもって私たちを満たし、御霊を注いで私たちを聖別し、全世界にいるあなたの子どもたちと共に、感謝をもって御名をほめ讃え、礼拝する者としてください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。」

聖書

——聖書に記された神のみことばに聴きましょう。旧約聖書詩編 4 2 編 7 節 B から 1 2 節。

「わたしの魂はうなだれて、あなたを思い起こす。ヨルダンの地から、ヘルモンとミザルの山から／あなたの注ぐ激流のとどろきにこたえて／深淵は深淵に呼ばわり／砕け散るあなたの波はわたしを越えて行く。

昼、主は命じて慈しみをわたしに送り／夜、主の歌がわたしと共にある。わたしの命の神への祈りが。

わたしの岩、わたしの神に言おう。『なぜ、わたしをお忘れになったのか。なぜ、わたしは敵に虐げられ／嘆きつつ歩くのか。』わたしを苦しめる者はわたしの骨を砕き／絶え間なく嘲って言う。『お前の神はどこにいる』と。

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ／なぜ呻くのか。／神を待ち望め。

わたしはなお、告白しよう 『御顔こそ、わたしの救い』と。／わたしの神よ。」

礼拝式文・説教 「命の神への歌と祈りが私と共に」

——つづきまして、新約聖書ルカによる福音書 24 章 5 節後半～7 節です。

「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なされたのだ。また、ガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」 (アーメン)

説教 「昼には主の慈しみ、夜には命の神への歌と祈りが、私と共に」

(牧会書簡で書いたことの骨子を、説教の導入とし、そのうえで、先週の振り返り〔以下の第一段落〕をしてから、本日の主題に入ってまいります。)

——**振り返り**： 全体の三部構成に関連して、先週、昨日—今日—明日の時間軸についてお話ししました。すなわち、本詩編の第一部では過去の想起としての喜びと感謝について語られていたが、第二部に至るとそれが、現在の歌と祈りに展開していく。そうして第三部でついに明日の礼拝で、歓喜のうちに琴を奏で歌う詩人の姿が見通される、という概観をしていたわけです。厳密に言えば、本日みなさんと共に詳しく読もうとしている第二部では、「私の内で魂は打ち沈み」、苦しい現況がなおも変わらない、ということが率直に描写されているのですが、その中で詩人は、なお神を「わが神よ」と呼ばわって「思い起こす」ことに心を向けていくこととなります。そうしてついに九、一〇節辺りまで読み進めると、その想起をとおして、詩人は今・ここに、この現状の中でも祈りと歌をささげることができる。しかも昼夜そうやって生きることができる、というわけです。あらためて、先週の要点のまとめにもなりますが、心からの祈りの中で、かつてあり、今あり、これからも変わらない神を、私と民の歴史に生きて働きかける命の神として思い起こすことが、過去から未来へと希望を開くことに繋がるのです——。

さて、具体的に、第二部に入ってまいりましょう。ここでは、当然ながら、第一部から引き継がれるものがあります。第一には、もちろん、苦難のただなかで神を思い起こし、その記憶によって、ただ神の御手によってしか実現しない命の回復の希望にすがっている祈り手の姿勢です。

第二に、ここで第一部から引き継がれているものとして、谷川や涙といった水のイメージがまた、ここに引き継がれて、さらなる展開をみることとなります。

——**ふたたび振り返り**：ここで、第一部についての説教をもう一度思い起こすことにいたしましょう。先週、イエスの十字架上の御姿と重ねるようにイメージした涸れ谷の川床で渴く鹿のイメージです。「私の神」と「私の魂」の双方に向き合う詩人は、神の御前にさらけ出した自らの飢え渴く魂を、谷川にあえぐ鹿にたとえていました。

礼拝式文・説教 「命の神への歌と祈りが私と共に」

乾燥地帯の間欠河川では、豊かに水が流れていたはずの場所が、からからに乾いてしまっていた、かつて享受したものを奪われた時の悲惨の情景を、ヨブ記を引きながら想像してみました。ヨブ記 6 章 15 節以下です。あらゆる苦難を経験したヨブは、ここで、かつての友・兄弟と呼び合った者との関係が昔のような瑞々しいものでなくなって、むしろ彼が絶望の打ちひしがれているまさにその時に、欺きに満ちたものに変わってしまい、その喜びが涸れ果ててしまった様子を、「流れが去った後の川床のよう」（15 節）だと表現しました。

「流れは氷に暗く覆われることもあり／雪が解けて流れることもある。季節が変わればその流れも絶え／炎暑にあえば、どこかへ消えてしまう。……今や、あなたたちもそのようになった。破滅を見て、恐れている。……」

谷川とは、そのようにして、人格的な関係が決定的に奪われたときの悲惨と心の荒廃のようすを表すイメージとして用いられていたのです。鹿は、かつて享受した潤いを求めてやってきたのですが、ようやくたどり着いた谷川には水を見出すことができず、夏の川床に立ち尽くしました。そして、はあはあと命の水を求めて、つまりはこのようにときに自分にその潤いと豊かさを与えてくださる力をもった唯一の方である神を求めてあえぐのです。ここでイメージされている魂の渴望は、死ぬほどのものである、詩人はまさに死に直面して、最後の日々を涙で満たしている状態だと、先週申し上げました。涸れた谷川は、死や終わりの表象であり、涙は死を前にして祈り続けてきた人間が神の前にさらけ出す、最後の嘆きの表現でした。

その谷川や溢れる涙のイメージを、第二部は引き継いでいるわけです。

しかし、同じ谷川と言いましても、ここに至って魂が直面するのは、夏の涸れ谷とは正反対の「激流」です。

そもそも冒頭の「うなだれる」という言葉には、流れにのまれて「打ち沈む」（聖書協会共同訳）という意味があり、魂が上からの流れに破碎されて「くずおれる／崩れ流れる」（月本昭男訳）というニュアンスがあることばです。ここから始まって、第二部では、水が人を砕き、呑み込み、ついにはその息の根を止める勢いをもって私たちに襲い来る混沌諸力のイメージで語られています。人生や社会における混乱と挫折、生きづらさ、息苦しさといふに來る終わり、襲い来る死の不条理をまざまざと思わせるイメージです。原典を私なりに直訳して、もう一度 7 節 B から 8 節を読んでみたいと思いますので、どうぞ詩人の魂が呑み込まれている状況について、水のとどろきに耳を傾けるようにして聞いてください。

「わが前にわが喉（たましい）は打ち沈み、それゆえ私はあなたを思い起こす、

ヨルダンの地から、そしてヘルモン群、ミツアルの（すなわち小さな）山から。

深淵が深淵を呼んでいる、あなたの激流の呼び声のためだ。

すべてあなたの白波（なみ）また波浪（なみ）が わが上（前）を越えて進んだ。」

礼拝式文・説教 「命の神への歌と祈りが私と共に」

ここで詩人は、北のヘルモン山系の雪解けの鉄砲水などとして突然押し寄せた流れに碎かれ、私の魂は波に呑み込まれているようだと言います。魂は流れの激しいうねりに巻き込まれ、深淵が呼び込む深淵によってなお深みにはまり、白波をたてる黒い波また波に上から呑まれ、前から後ろから押され、下に押し沈められていくのです。潮の流れに巻き込まれたヨナの「陰府の底」における死ぬほどの体験に近い情景描写です。ヨナは、神の言葉に聞かずに逃亡をはかった先で、嵐の海にのみれ、絡みつく水草に首を絞められ、深く海底に穴をあけていると信じられていた、あらゆる生命が絶える滅びの世界、陰府（よみ）の入り口にまで打ち沈んだ死の体験を、後の祈りの中で次のように表現しました（ヨナ 2 : 3 以下）。

「あなたは、わたしを深い海に投げ込まれた。潮の流れがわたしを巻き込み／波また波がわたしの上を越えて行く。わたしは思った／あなたの御前から追放されたのだと。生きて再び聖なる神殿を見ることがあろうかと。大水がわたしを襲って喉に達する。深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。わたしは山々の基まで、地の底まで沈み／地はわたしの上に永久に扉（あるいは門＝かんぬき）を閉ざす。」

まさに、詩人が神殿から引き離された日々の苦悩を歌った詩編 4 2 編と同じ嘆きが、ここで表明されているということができると思います。なお、水草が頭に絡みつくと表現されているところは、水草が首に絡みつくと訳すこともできるかと思えます。首あるいは喉が締めつけられた溺れる者は、息ができません。ヘブライ語で喉という単語はネフェシュといいますが、詩編 4 2 編ではネフェシュは魂と訳されています。水中で息ができないばかりか、水草で首が、あるいは喉が締め付けられたヨナは、肉体の死とともに、魂の滅びの恐怖にさらされたのでないかと想像します。私たちの詩人の直面した死もまた、そうでした。死んだら魂は神のもとに、などという淡い期待も、もつことができないほどの終わりが、ここで表現されているともいえるかもしれません。

ここで大きな問題は、私を苦しめる深淵が、他ならぬ神の呼び声に答えて呼び交わし、うごめくことである。ヨナも、あの嵐やこの大荒れの潮の中に自分を投げ込んだのは神に他ならないと語っていましたが、私たちがの詩人も、同じ恐れを感じていました。つまり、私の最後の望みだとすがっていた神が、わたしを見捨ててしまわれたので、私は今この悲惨の中に捨て置かれているのではないか、という考えたくないような恐怖が頭をよぎるのです。先週、わたしたちは、神の御前に祈れば祈るほどに、いかに私たち自身や私たちの生きる世が神から離れてしまっていたかを思い起こさざるをえない、神を知るほどに私は滅ぶべき小さなものだと告白せざるを得ないと申し上げました。神は私を放っておかれるどころか、こらしめるために嵐に命じ、海に命じ、神の声のとどろきにこたえるすべてをもって、私を滅ぼそうとしておられるのではないか、神の御前にわきあがってきた弱さと罪の自覚は、そのようにして、恐るべき神の怒りに心を向けさせるのです。もちろん、いろいろな災害の被害者は、自らの罪によってその悲惨を被っていると考えられるような、短絡的な因果思想には、注意をしなければなりません。しかし、災害がしるしとなって、

礼拝式文・説教 「命の神への歌と祈りが私と共に」

私たちのこれまでの日常がどうだったか、という問いにさらされることは事実です。私たちは、神の御前に誠実だったかどうか、命を大切に生きてきたかどうか。神が愛される者たちが、日常生活を送る私たちのそばで今の私のように苦しんでいるときに、私は何をしていたらいいでしょうか。嵐も病もそのたもろもろの災いも苦難も、こうして私たちの日常を問い直すきっかけとなります。私たちはこれまで、この死に至る道を省みもせず突き進んできたのではないだろうか。ここで私を呑み込む不条理は、すでにこれまで私が真理をわすれて生きてきたことと関係ないことだとは言えないのではないだろうか。

神の呼び声のとどろきによって、水が騒ぐようすから、私たちは、聖書のはじめの頁でいわれていたことを思い出します。言葉の力で水を上下にわけ、下の水を陸と海に分けた創造の業について伝えられている箇所です（創世記一）。神はみことばによって、水を分け、生ける者の条件を整えることが生み出すことができる方であると同時に、御心ならばその分け隔てをなくして天の水を地に溢れさせ、海の混沌をもって生ける者の生活の場を呑み込ませることもできる。そうかんがえると、今詩人が経験している死とは、いわば創造の秩序をひっくり返す神の怒りの出来事なのではないか、と。

なんと恐ろしいイメージでしょうか。しかしどうしても、私たちの罪を思うと、その怒りはまぬかれないというのが、イスラエルが民の歴史や一人ひとりの人生を通じて思い知ってきたことだったのではないのでしょうか……。

さて、神がわたしたちにむかって怒りをあらわにされる方であるならば、その怒りが向けられたとき、私たちにほはや、何も希望が残らないのでしょうか。神によって与えられる死ならば、その死の先に希望などあるのでしょうか。

死を前に、私たちの絶望が横たわる瞬間です。しかし、そうしてうなだれた魂の描写をした8節から、重い気持ちで9節へと読み進めていくとどうでしょうか。なんとそこには、今詩人を満たす希望の言葉が続くことになるのです。これはどういうことでしょうか。

ここで思い出していただきたいことは、詩人が、神を正しく想起する祈り人であったということです。本日箇所の最初、「わたしの魂は……あなた（神）を思い起こす」と言われています。もちろん、そこで神の怒りを思わずにはおれなかったわけですが、しかし、たとえば深淵や混沌が、他のオリエント世界では神とは独立した反対勢力の神々として存在するのに対し、その怒りのわざはまた、もともとすべてを造り、命を生み、保ち、新しくしてこられた方のわざであって、その意味で怒りの神は、命の神と切り離すことができないことを同時に思い起こすことができました。この嵐の出来事が、創造主の言葉の力のもとにあるのであれば、これらを鎮める力もまた、ただ神にある。そしてその神は、あらゆる世代の祈り人が声を合わせて言うとおりの「**憐れみ深く、恵みに満ちた神。怒るに遅く、慈しみとまことに富み／幾千代にわたって慈しみを守り過ちと背きと罪とを赦す方**」（出エジプト三四・七他）である。そう詩人は、怒りの神を想起しながらも、怒りよりももっと大きな慈しみと憐れみをもって、赦し、癒し、新しい命でもって報いる神として、神を想起することができたのだと思うのです。

礼拝式文・説教 「命の神への歌と祈りが私と共に」

そこで、日夜ぶつけられる「あなたの神はどこにいるのか」という他者の嘲笑や自らの慄きに満ちた問いに、今や詩人は昼夜の祈りを対峙させることができるようになってまいります。

この神のさばきのただなかでも、わたしは同じ神の憐れみにすがろう。

「昼、主は命じて慈しみをわたしに送り

夜、主の歌がわたしと共にある。わたしの命の神への怒りが」！

確かに主は、死をもたらす力を持った方だけれども、主の本質は死で終わらない命への方向付けを常に示していたのだと、詩人は神への信頼を新たに、ふたたび息を吹き返すのです。

主はその御言葉をもって「慈しみを私に送」ってくださるので、夜も「主の歌が私と共にある」（四二・九）。たしかに、骨また骨を砕く苦しみは去っておらず、現状ではなお神への激しい直訴が祈りの内容であることに変わりはありません（一〇節以下）。しかし、彼にはやはり、最後の希望があるのです。たとえ、神が怒られても、神は怒りで終始される方ではない。神は愛の神だ、憐れみの神だ。だから、この悲惨は悲惨に帰結するはずがない。死は死でおわらず、命に至る道が、御心によって開かれる。この喉が、魂が開かれ、神にむかって感謝の祈りを叫び、その御名を讃える日がきっとやってくる。いや、今がその日、今日こそその恵の日なのだ！と。

詩人と同じく、嵐にのまれて水草に首をとられたというヨナの詩編には続きがありました。

「しかし、わが神、主よ／あなたは命を滅びの穴から引き上げてくださった。

息絶えようとするとき わたしは主の御名を唱えた。

わたしの祈りがあなたに届き／聖なる神殿に達した。偽りの神々に従う者たちが／忠節を捨て去ろうとも／わたしは感謝の声をあげ／いけにえをささげて、誓ったことを果たそう。

救いは、主にこそある」！

さて、死が死で終わらないとの確信のなかで、祈ったヨナは、神の言葉によって遣わされた魚の腹の中で生かされ、死の世界にのまれた三日後に、陰府の底から命の地に吐き出されたとヨナ書は物語ました。まるでおとぎ話のような古代の知恵文学の描写ですが、このお話しの真意を深く受け取った方が独りおられたことを私たちは知っています。このヨナのしるしが、御自分のことを表していると説かれた、主イエス・キリストです。主は、ヨナや詩編 4 2 編の詩人がそうであったように、死の波に呑み込まれてしまわれました。それは、たしかに、人の罪に対する神の怒りの側面をもっていたのです。人が捉え、裁判にかけ、侮り、傷つけ、ついには殺してしまったのですが、その間、イエスは人々にではなく、神に訴え続けました。私は渴いています。わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。なぜなら、この死と怒りの現実、神の憐れみによってしか解決しないことを、イエスが知っておられたからです。イエスはそのま

礼拝式文・説教 「命の神への歌と祈りが私と共に」

ま、息を引き取られました。しかし、これもまた素直な子どものような心をもたなければ、鼻で笑ってしまうようなお話しなのですが、聖書は、その死が死ではおわらなかったとして、その続きを物語るのです。ヨナが魚にのまれて死の世界から三日後にはきだされたように、イエスもまた、死のふちから、人間が負うべき最大の苦しみや混沌、諸力の支配から引き上げられ、新しい創造をもたらす命の道に立ちあがられたというのです。復活など信じられないとおっしゃるでしょうか。しかし、そういうとき、私たちは、死は死で終わりである、と信じていることを告白していることを自覚しなければなりません。病にたおれ、老いの弱さに伏し、不条理に晒され、死して滅びるそのとき、最後の望みがたたれてしまう、そうあなたは信じるのでしょうか。聖書は、いや、たしかに死は私たちの知恵や力にとって、決定的な限界を示すものであるが、命の神の限界は、そしてその愛の限界は、そこにはないというのです。わたしたちもまた、イエスに結ばれて、死んでもなお生きることができる。そう信じているなら、幸いです。イエスの十字架と復活の出来事を知る以前の預言者たちは、命の神、愛の神への信頼から、すでに死が死で終わらないという希望を歌っていたのだと思います。こう考えてみますと、詩編 4 2 編 8 節と 9 節の間には、三日ほどの隔りがあるように思われてなりません。その隔りを超えられるのは主なる神だけです。そして、神がほんとうに、私たちを憐れみ、死を凌駕する命をもたらしてくださるのであれば、その時、私たちがなすべきことは感謝の祈りをささげることに違いありません。昼わたしを支える神の慈しみに感謝し、夜、主がわたしの口にのぼせてくださる喜びの歌をうたうこと、神がわたしの命の神であることに喚起して、喉を震わせて祈り歌うこと。復活信仰は、私たちを不安ではなく、喜びに震わせ、潤う喉をもって歌わせる信仰です。苦難の日には、主の十字架を思い、復活の希望にたって繰り返す、うたいましょう。

「なぜうなだれるのか、私の魂よ。なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう（＝讃え歌おう）『御顔こそ、わたしの救い』と。わたしの神よ！」 アーメン。

祈祷 感謝／執り成しの祈り

全能の父なる神よ、あなたは天と地とそこの中にあるすべてのものを作り、これを保ち、支え、くすしい御旨（みむね）をもって導いておられます。またあなたは、今もなお私たちのただ中で大いなる御業を行い、キリスト・イエスの救いにあずからせ、あなたの御元に立ち帰った私たちの魂を、聖霊によって満たして、新しい命の希望のうちに生かしてください。私たちはいと低きものたちですが、あなたの御業を思い、わたしたちに豊かに確かに注がれている慈しみを思い、御名をほめ、心からの感謝をささげます。

神よ、いま新しい局面にあつて、ただ十字架と復活の主にすがり、祈りつつ歩み出した私たちの群れを、顧みてください。あなた以外のものに、とくに恐れと不安、不満と高慢に支配されることなく、あなたの御子の救いの真理を常に私たちの目の前に覚えて歩むことをえさせてください。

私たちと同じ困難に直面している近隣の諸教会を、そして全世界にあるあなたの教会の歩みを導いてください。とりわけ日常の生活を奪われた中でささげられる礼拝を、あなたが祝福してくださいますように。主の体なる教会を励まし、あなたが負いやすくしてくださるそれぞれの軛を、確かに担うことができます

礼拝式文・説教 「命の神への歌と祈りが私と共に」

ように。あなたの福音をすべての人々に、とりわけ不安のただ中にいる人々に、宣（の）べ伝えさせてください。悲しむ者ととも悲しむ仕え人を、働き人をお遣わし下さい。

主よ、あなたは、私たちすべての者の必要をご存知であり、それを完全に満たして下さるお方です。心身の病に苦しむもの、とくに入院中の姉妹たちを顧み、励まし、支えて下さい。愛するものを失い悲しむ者、多くの悩みのうちにたたずんでいる者みなを慰めてください。貧しさの中で叫ぶ者、飢え渴いて求めるものを満たしてください。争いの渦に巻き込まれているもの、見えない敵と戦う医療従事者、ゆえなく囚われている者、圧迫されている者、災害後の痛みを負い続けている者を自由にしてください。重責を担っている者、とくに、国々の代表者、人を裁く立場にある者、こどもたちに教えるつとめをになっている者、宗教者、人の上に立っている者が、あなたに対し、真理に対するおそれをもって、事にあたることができますように。新しい歩を始めようとしている子どもたち、若者たちの成長を見守ってください。年をかさねた者たちをはじめ、すべての者を、あなたにある平安のうちに憩わせてください。

どうか私たちを御手の導きの内においてくださり、今日からはじまるこの一週をあなたにささげ、それぞれの生活の場、それぞれ遣わされた場所であなたに仕える者として歩ませてください。そのうえですべてを、あなたの栄光のもとに照らし、御国の完成に役立ててください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

信仰告白

——ニカイア信条によって、私たちの信仰を言い表しましょう。

「わたしたちは、唯一にして全能の父なる神、天と地と、見えるものと見えないものすべての造り主を信じます。わたしたちは、唯一の主イエス・キリストを信じます。主は、神のひとり子、すべての世に先立って父より生まれ、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られたのではなく生まれ、父とおなじ本質であり、万物はこの主によって造られました。主は、人間であるわたしたちのため、わたしたちの救いのために天よりくだり、聖霊によっておとめマリアより肉体を受けて人となり、わたしたちのため、ポンテオ・ピラトのもとで十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にあるとおり三日目に復活し、天に昇り、父の右に座しておられます。主は、栄光のうちにふたたび来られ、生きている者と死んだ者とをさばかれます。そのみ国は終わることがありません。わたしたちは、主にしていのちの与え主なる聖霊を信じます。聖霊は、父と子から出て、父と子とともに礼拝され、あがめられ、預言者を通して語られました。また、一つの、聖なる、公同の、使徒的な教会を信じます。罪のゆるしのための唯一の洗礼を告白し、死者の復活と来たるべき世のいのちを待ち望みます。アーメン。」

礼拝式文・説教 「命の神への歌と祈りが私と共に」

奉獻と祈祷

——主の恵みに対する私たちの感謝と献身のしるしとして、献げものを献げましょう。

(家庭礼拝で席上献金をなさる場合、教会では、礼拝休止措置が終わった後の最初の礼拝でまとめて受付いたします。維持献金やイースターなどの感謝献金、特別献金も同様になります。)

主の祈り

——（「献金の祈り」に続いて声を合わせて）

**「天にまします我らの父よ、願わくは、み名をあげさせたまえ。み国をきたらせた
まえ。みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用のかてを、今日
も与えたまえ。我らに罪を犯す者を我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたま
え。我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ。国と力と栄とは、限りなく
なんじのものなればなり。アーメン。」**

頌栄

——頌栄 5 3 9 番を歌い、主の栄光の御名を讃えましょう。

「あめつちこそりて かしこみたたえよ、みめぐみあふるる 父、み子、みたまを。

アーメン。」

派遣と祝福

「平安のうちに行きなさい。希望と喜びのうちに主に仕え、すべての人に愛を伝えなさい。主イエスは世の終わりまであなたがたと共におられます。」

「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔を向けてあなたを照らし／あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けて／あなたに平安を賜るように。アーメン。」

——以上で礼拝を終わります。報告: **4月13日(月) 神学校入学式**は、中止となりました。神学校の新学期も、5月以降の開始となります。

聖書の学びに関するお知らせ

木曜日の祈祷会にかわり、こちらに、聖書の学びの手引きとして、「旧約聖書における病と癒し」と題した文書載せることを予告しておりました。大変恐縮ですが、学び始めるときりがない大きな主題であり、公表できる形にまとめるには、まだまだ時間がかかりそうです。いずれこの文集とは分離した形で皆様にお届けし、教会ホームページでも公開いたしますので、しばらくお待ちください。郵送希望の方は、お知らせください。お知らせを受けた場合でも、来週第三報と合わせお送りすることになります。ご了承ください。

日々の祈り 「復活感謝・希望の祈り～とくに教会や地域の子どもたちのために」

教会による「日々の祈り」。今回は後藤俊文長老が、「復活感謝・希望の祈り～とくに教会や地域の子どもたちのために」として言葉にしてくださいました。私たちは、「主は生きておられる！」との報せに接し、死を凌駕する命の道が開かれたことを感謝し、希望のうちに、**生ける喜びにあふれるイースター**を迎えます。どうぞ「**主の祈り**」とともに、朝毎にお祈りください。

愛と憐れみに富みたもう主イエス・キリストの父なる神様、御名を讃美いたします。あなたは私たち人間を罪の内より救い出されるため御子を地上にお下しになり、罪なき御子を私達人間の罪の贖いとして十字架の死に渡されました。かくまで罪多き者のために、愛と憐れみを示してお救いくださる御神と、御父に十字架の死に至るまで従われた主イエス・キリストに感謝いたします。そして罪に死ぬべき人間が、あなたへの信仰によって死に打ち勝ち、新しい命に生きることを、私たちは、御子の復活によって示され、希望の光を与えられました。

生るにも死ぬにも主イエス・キリストと共にあり、新しい命の希望を覚える群れとして、心を合わせて御名を讃美いたします。あなたはこの地上に、あなたを信じ、み言葉を宣べ伝える群れとして、教会をたてることをお許しください、私たちを、毎週の初めの日に呼び集められて礼拝を守るお恵のうちに置いてくださっています。しかし今、私たちの群れは、新型コロナウイルスの脅威に遭い、共に集い顔を合わせて礼拝を捧げるお恵にあずかることがかなわぬ事態となっています。すべてをすべ治める全能の父なる神よ、私たちはここから何を聞き、どう従えばよいのでしょうか。もとより私たち人間にはあなたのみ旨は計り知れませんが、あなたがなされることは愛と憐れみをもってなされることであることを知らされております。

あなたを信じる群れとして、共に祈ります。あなたを信じる群れとして、み旨にかなうなら、共に集められて礼拝を守る恵みのうちにおいてください。み言葉を宣べ伝えることに仕えさせてください。共に集うことができず心弱くなっている者を強めください、特に高齢のもの、病の不安のうちにあるものをお癒し下さい。その方たちのために祈る言葉をお与えくださり、祈らせてください。

また幼いものたちのことを覚えます。教会の子どもたちや、子ども食堂に通う子どもたちをはじめ、地域の子どもたちを祝福してください。あなたは「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」（口語訳伝道の書 12章 1節）と教えられています。教会で真の知恵を学ぶことに困難を覚える子どもたちや、学校が休校となり学ぶ機会を奪われ居場所を失っている子どもたち、家庭や社会の人間関係に不安を覚えている子どもたちを、あなたの御手のうちにおいてください。アジアにあって、また世界にあって、次世代を担う子どもたちが、命の希望に至る道を知り、喜び溢れて自由に大胆に歩みを進めていくために、教会が何をなしてあなたに仕えて行くべきかを、お示しください。

あなたは私たち人間に艱難をお与えになられますが、堪え得ぬ艱難はないことを、信じて乗り越える知恵と力が与えられることを信じます。御名によって歩むことを得させてください。

この貧しき祈り、主イエス・キリストの御名によっておささげいたします。 アーメン。